

Title	蝦夷研究と蝦夷地開拓：日本民族學の東雲
Sub Title	
Author	中井, 信彦(Nakai, Nobuhiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1943
Jtitle	史学 Vol.21, No.3/4 (1943. 6) ,p.171(397)- 214(440)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19430600-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

蝦夷研究と蝦夷地開拓

——日本民族學の東雲——

中井 信彦

一

天明六年五月五日、東蝦夷地巡察中の最上徳内は厚岸の乙名^{オトナ}イコトイの手船で擇捉島の奥シャルシヤムに着いた。此地の乙名は名をヤウウカアイノと言ひ、その大身智謀は深く土民から畏敬せられてゐた。イコトイは彼の聾に當るので、急に濁酒を造り宴を張つて久闊を敘することゝなつたが、イコトイに伴はれて彼の宅に赴いた徳内は、聾舅對面の模様を次の様に書きとめてゐる。

「亭主マウウカハ上座ノ左ノ隅に居ル、爰ニ於テ相互ニ默々トシテ言語ヲ發セズ、暫ク有テ家來ノ長夷進ミ出テ聾ノイコトイニ挨拶言ヒケレト、チャアウケトエゾノ切口上ニテ請答ヲ言フ、此時ニハ平日ノ言葉トハ大キニ違ヒ、予ガ耳ヘハ一向ニ知レズ、唯ヨク見テ居ルノミ也、夫ヨリ互ニ席ヲ進ミ

寄テ、額ト額ヲ付合せ、左右ノ手ニテ渠ガ耳ヲバ某ガ押ヘ、某ガ兩耳ヲバ渠ガ押ヘテ相互ニ無言ニテ感涙涕泣スル事良暫クナリ、感涙涕泣止ミテ座ヲ退ゾキ、相互ニ再拜シテチャアウケニテ時宜ヲ演説スル也、(中略) 夫ヨリ酒宴始マリ蝦夷ノ土人大勢群集セシ事也、其中ニ赤人三人アリ、予ト三ヶ國ノ人物寄合ニテ打解タル酒興ニ依テ、蝦夷歌ヲ諷ヒエゾ踊リ、又赤人ハ赤人哥ニ赤人踊リヲシタリ、予モ日本ノ戲レ哥ヲ諷フ、相互ニ遠慮斟酌モナク再ビ逢レヌ坐興ニゾ乗ジケリ。」

これは素朴な文章であるが、「唯ヨク見テ居ルノミ」で蝦夷の赤裸な感情の表現に強く打たれた徳内が、その感激を戯れ哥の放吟に盛つたその場の様子は、簡素な行間の裡に躍如たるものがある。未開民族の端的な生活表現の中に感激を見出すこの純乎たる人間愛こそ、民族學が據つて立つ第一の基礎でなければならぬ。

徳内が松前を發足して蝦夷地に向つたのは、その年正月のことであつたが、三石といふ處で松前の豪商阿部屋傳吉といふ者に出會つた。

「(傳吉) 問曰、當年元旦の晝頃天俄に曇リ闇ノ如クニ成タリ、依テ蝦夷人共大キニ騒ギ、ベラタゲトテ関ノ聲ヲ上ゲテ叫ブ事頻リナリシガ、如何ナル天災ニヨツテ斯ハアリタルゾト云、其詞ノ内ヨリ略曆ヲ一枚アタヘタリシカバ、讀テ元日ニ日蝕有リシ事ヲ知リ大キニ悦ビタリ、依テ近村ノ疑惑ヲ解タリ、夫ヨリ奥蝦夷地ヘ趣ク路次ニテカノ曆ヲ與ヘケレバ元日ノ日蝕ナル事ヲ知リテ蝦夷ノ土人ニ示

シテ疑惑ヲハラシケリ、愚ヲモフニ此等ハ開國最第一ニ關たる處也、早ク補ヒ度事ハ此等ノ事ナリ。」
こゝに示された自己の文化への確信とそれによる未開民族開明の熱意と。民族學は決して好奇の眼から
生れ出るものではない。人間愛がこの確信と熱意とを得て未開人に觸れる時、そこに民族學の誕生はあ
るのである。

そして最後に、この精神が

「今ノ時勢ナリ、此時勢ニ乗ジテ開國ノ大業ヲ創置カバ」

と時代への結合を見出した時、民族學は初めてその現實的發展の基礎を得るのである。

茲に引用したのは、悉く寛政二年最上徳内によつて物された「蝦夷草紙」の一節である。凡そ蝦夷に
ついでの記事を残した旅行家や學者は古來鮮しとしない。しかし乍ら、上に見た如き精神と時代的意識
とを以て蝦夷に接した者は、蓋し徳内を以て嚆矢とするであらう。然るが故に筆者は此の書の中にこそ、
日本民族學の東雲を望むのである。

この徳内の「蝦夷草紙」が如何にして得られたか。之を歴史的に跡づけようとするのがこの試論であ
る。

二

徳内を蝦夷地に送つたのは、その師本多利明であつた。利明は後年寛政四年七月附の上書の中で、徳内渡島の事情について、かう記してゐる。

「私儀北越出生の者故、壯年の節は水主に紛れ度々渡海仕候、蝦夷土地風俗人情の儀能く奉存、五十歳の今日迄も開發の仕方晝夜心底不相離工夫相凝罷在候、然る所八ヶ年已前已年春^{○天明五年春ヲ指ス}蝦夷土地見分御用被仰出候の間、甚以能き時節と奉存罷在候所、幸と前以知る人にて御普請役青島俊造^{（龜）}と申仁、右御用被仰付候に付、私儀も如何様の御奉公筋にても彼地に罷越度旨相願候處、幸に足輕ニ召抱可吳段申聞候ニ付取極申候、然る處私儀折節病氣に付、丹州村山郡楯飛村出生の者にて、江戸奉公稼に罷在居町人の手元に罷在候私門人徳内儀、甚以前より私手前に差置、器量の程も見届候者ニ付、私代りに差遣度段、右俊造へ相願差遣申候、其節蝦夷土地へ被罷越候御普請役の内、天文地理等の心得有之候衆中も無之、右徳内儀少々相心得候者に付、東蝦夷地諸島道先相勤渡海仕候^{（三）}。」

即ち豫て蝦夷地開拓に着目してゐた利明は、天明五年幕府の調査隊派遣を好機として之に参加せんとしたが、病氣の爲め門人徳内を代理として渡海させたといふのである。尤も利明は寛政元年十一月の「蝦夷拾遺」の中では「小計策に當りて（徳内を）蝦夷土地に遣しけり^{（三）}」とも言つてゐるから、病氣の爲云

云の一條は口實に過ぎなかつたかも知れない。

抑出羽の百姓甚兵衛の倅徳内が志を立て、江戸に上つたのは、天明元年の事に屬するから、贅を利明の門に置いたのを假に同年と見ても、蝦夷地派遣まで前後五年を數へるのが事實である。従つて「甚以前より私手前に差置」の語は、やゝ誇張に過ぎる感があらう。但し、縦しその歲月は永からずとするとも、徳内の蝦夷並に蝦夷地に對する眼が、直接利明によつて開かれた事は疑ひの餘地がないのである。

天明五年の蝦夷地調査に就ては、いま茲に詳述する限りでないが、大局から見れば、物資不足に基く社會的困窮を打解しようが爲の、田沼政權が試みた一開發事業の準備工作であつたと言ひ得る。田沼政權はこの時艱克服の爲には、名分上の封建體制を放棄することをも敢て辭さぬ積極的な一面をもつてゐたのである。

「父様をば田沼時代の人、大智者とおもゑて有しとぞ。或時公用人とさしむかひにて、用談終て咄しの内用人いふ。我主人は富にも祿にも官位にも不足なし。此上の願には、田沼老中の時仕置たる事とて、ながき代に人の爲に成事をしおき度願なり。何わざをしたらよからんかと問合せしに、父様御こたへに、夫はいかにもよき御心付なり。されば國を廣するくふうよろしかるべし。」(問)夫はいかがしたる事ぞ。(答)夫蝦夷國は松前より地つゞきにて、日本へ世々隨ひ居る國なり。これをひらき

て、みつぎ物をとるくめんを被成かし。日本を廣くせしは田沼様のわざとて、永々人のあをぐべき事
よと被仰しかば、文盲てやい^(手合)ははじめてかようの事をき、恐れ入し了簡なり。いざさらば其あらまし
主人へ申上度し。一書にしていだされよといひし故、父様書て出されしを、随分うけもよく感心有て、
其奉行に父様をなさんといひしとぞ。^(三)

これは球卿工藤平助の長女只野眞葛が「昔ばなし」の中で、平助の「赤蝦夷風説考」の書かれる事情を
語つてゐる條りである。時は天明三年の正月に屬する。この風説考の上卷は、先づ露國が豫てわが漂流
民から日本語を學び等して、周到なる用意の下に南下しつゝある形勢を述べた上、彼國が「何事を企る
のも夢にも知らず打捨て置くべき事にはあらぬ也、依て願はくは細吟味有之」度しと希望し、更に密貿
易の行はれ得べき現狀を改め、蝦夷地の金銀山を開き、之を以て進んで露國と公然通商すべしと説き、
この對露通商は長崎に於ける唐紅毛との交易にも好影響を齎すべしと豫想し、「惣て國を治るの第一は、
是我國の力を厚くするにあり、國の力を厚くするには、とかく外國の寶を我國に入るを第一とすべし」
而して商賣を以て身上とする外國より寶を引入るゝことの困難なる現下の日本としては、宜しく蝦夷地
の金山を開きて露國と交易し「此開發と交易の力をかりて、蝦夷の一國を伏從せしめば、金銀銅に限ら
ず一切の產物皆我國の用を助くべし」と全般的な蝦夷地開拓を結論し、若し無爲に打過ぎて蝦夷の露國
に服屬するに至れば「悔て歸らぬ事也」と言ひ、「何れ種々穿鑿して糺し度物は、蝦夷の金山・ヲロシヤ

の振舞也」と繰返して言葉を結んでゐる。^(四)

この赤蝦夷風説考は、右の如き要旨の上卷天明三年正月附に添へて、是より先きベシケレイヒング・ハン・ル

ユスランド千七百四十年板ゼヲカラアヒ千七百六十九年板の兩書を江戸在府中の一通辭から借用した平助が、さる「鴻學の

士」に抄譯して貰つたといふ下卷天明元年四月廿一日の日附ありとから成つてゐるのであるが、この書と平助の傳記とを

詳細に研究せられた大友喜作氏は、彼に資料の蘭書を貸與したのは、かの有名な和蘭大通詞吉雄幸作であり、蘭語の出來ぬ平助の爲にこの書を讀んでやつたのは、解體新書で不朽の名を残した前野良澤であらうと推定せられてゐる。^(五)

さて、風説考を得た幕府當路は、北邊事情の緊迫については充分の理解を持ち得なかつた様であるが、大飢饉の直後ではあり、利源の開発に躍起となり印旛沼開拓に着手してゐた當時でもあつたので、平助の説く蝦夷地開發と對露通商とに頗る食指を動かし、勘定奉行松本伊豆守秀持を主任者として、實狀調査に乗り出すことゝなつた。そこで秀持はかねて蝦夷地に着目してゐた部下の勘定組頭土山宗次郎に先づ諮問したので、宗次郎は天明四年五月附を以て長文の報告書を提出し、書中蝦夷島の地理から説き起して蝦夷虐使の實相を示し、金銀其他鑛産の有望なることを語つた後、近年露人が蝦夷島に通商を乞ひに來つた事實、並に松前藩が交易は禁じたものゝ、その實他國者を使つて拔荷を行つてゐるとの風聞を上申して、平助の所説を裏書きすると同時に、對露關係特に密貿易に關する一段切迫した事態を提示し

たのであつた。尤も對露事情の近況は、宗次郎の場合も平助の風説考も同じ松前藩の元勘定奉行湊源左衛門の口から語られたものであるから、この點で二人の所説が符合するのは當然のことである。尙ほ宗次郎に松前事情の資料を提供した今一人に、前年秋渡島し、是年紀行「東遊記」を著はした狂歌師平秩東作があることを見逃してはならない。

秀持はかく宗次郎に諮問すると共に、再三平助を召出して下問を重ねた上、五月廿三日附を以て臺閣に對し正式に平助の所説を紹介し、「金銀山取開方、ヲロシヤ交易の譯等御取調」方を提案してその承認を得た。そこで宗谷——樺太の北口と千島口との兩方面に於ける異國交易の狀況並に蝦夷地金銀山其他産物の取調を目的とする調査隊の派遣を決定し、渡海に要する船舶は伊勢大湊で八百石積廻船二艘を新造し、之が費用を補填する爲廻船方御用達苫屋久兵衛をして蝦夷地との交易を試ましむることとし、茲に御普請役山口鐵五郎高品、菴原彌六宣方、佐藤玄六郎行信、皆川沖右衛門秀道、青島俊藏政教の五人に各々部下を配して江戸を出立、蝦夷地調査の途に上らしめた。是方に天明五年二月ことで、徳内が始めて渡島したのは、上述の通りこの青島俊藏の手に附いてゐたのである。

以上の極めて概略な經過によつても知られる通り、天明の蝦夷地調査は端緒を長崎通詞吉雄幸作邊りから發してゐるのである。それを更に遡れば、シベリヤ流刑のハンガリヤ冒險兒モーリッツ・フォン・ベニヨウスキイ、所謂ハンペンゴローが脱走の途次長崎の蘭館長に宛て、露國の南下千島併呑の形勢を

通告したことから、事が始まつたのである。彼の通告は和譯の上、蘭館長から幕府に上られたのであるが、幕府當路者はこれに別段の對策を施さうとはしなかつた。蓋し事態の重大さを正しく理解し得なかつたからに外ならぬ。然しこの通告の内容は、蘭館及び通詞の口から、彼等に近附いた當時の新知識の人々に傳へられ、大きな衝動を與へると共に、蝦夷地への新しい關心が此等の人々によつて惹起せられることゝなつた。即ち安永三年大通詞松村君紀から傳へ聞いた平澤元愷は、同七年五月自ら松前に遊んで、藩主に壘田の事を説いて居り、同六年には林子平が之を甲比丹ヘイトから聞いて、後に三國通覽圖説著作への動機を與へられ、三浦梅園は同七年吉雄幸作から北邊の形勢と蝦夷統轄の術とを聞いてゐる。そして是等幾筋かの流れの中で、幸作から平助へ傳はつた一筋に、恐らくは幸作良澤らの開國貿易意見が合流して赤蝦夷風説考の提出となり、之が幕府の欲するものと合致する限りに於いて當路の採擇する所となつたものであつた。

但しその際、對露交易説が單なる空論に走らずして、蝦夷地開拓の實際的施策と結び附いた點に關しては、右の如き知識の傳授の外に、更に遡つて考ふべき問題が含まれてゐると思ふ。

三

既述の通り蝦夷地の開拓調査は、露國の南下に對處すべき北邊強化の必要から説かれたものであると

同時に、國內的には當時の社會經濟的事情に基く政治的方途なのであつたが、この場合、その政治的施策を慫慂し支持したものととして、一般的に言つては學者の實證的精神、實質的には物産學の力を見逃すことが出来ない。現に、かの工藤平助にしても、その本務は仙臺藩の侍醫として「(大槻)磐水と共に命を奉じて封内産する所の藥物三十種の眞否精粗を檢し」た本草學者であると同時に、「多能にして製造の事に精しく、意匠常に規矩の外に出でざるあれば、推考一再、忽にして機器立ろに成る。西洋製器械の如きも亦能く之を模成」し、「而して性左手を便とし、彫刻製圖皆左手に成る」風の技術家であり、勢ひの赴く所、「割烹を嗜み、……其味割烹人の及ぶ所にあらず、世呼びて平助料理と稱す」^(六)底の腕達者であつたことを思ひ合はすべきである。

一體江戸時代に於ける學問は、伊藤仁齋・荻生徂徠の所謂古學派の出現によつて新しい發展の途が拓かれたと言つてよからう。その基調となつたものが即ち實證的精神の主張であつて、此の精神が雷に學問の域に止まらず、元祿の文藝等に於いても顯著に認められる一の時代的思潮でもあつたことは、人よく知る所である。そしてこの實證的精神の流露するところに新しい學問の兆が現はれ初めたのである。今日考古學の先驅者と謳はれる伊藤東涯^(仁齋の子)新井白石も亦この流れの中に生れ出た^(モ)。特に白石は蝦夷に關する最初の纏まつた書物である「蝦夷志」の著者として、民族學上にも先驅的な地位を占めて居ることは、之亦知らるゝ通りである。白石のそれは考古學に於けると同じく、机上の、從つてまた文

獻的な民族誌、地理誌に過ぎなかつたが、暫くは後繼者を見出し得なかつた程時代に先駆けた、彼の着眼の進歩性は高く買はるべきものである。

尙ほ白石の正徳貨幣改鑄並に緊縮策による消極的な物價騰貴抑制の施策にあきたらず、よろしく周圍五百餘里の大國たる蝦夷地に農業を勵め、之によつて得らるべき生産力の増強に積極的な解決の途を見出さんと説いて、蝦夷地開拓論の第一陣たる名譽を得た「開疆錄」の著者並河天民も、伊藤仁齋門下の逸足であつた事實を知れば、一見唐突の如き其所説も、堀河學統の持つ思潮の一顯現として、寧ろ自然に理解出来るのである。

さて、この方面に於ける仁齋東涯の學統は青木昆陽に傳へられた。昆陽は甘薯先生の名で汎く知られてゐる通り、本草學者でもあつた。この本草學は、素より古い學問であるが、之を中興したのは、白石が讚歎して止まなかつたといふ江戸の稻生若水であつた。この學問の性質上本來さうあるべきであるが、若水には門人松岡恕庵と共に山中を雨に打たれ乍ら採藥した逸事が傳へられてゐる通り、「書物の上ばかりでなく、實地に山野に草木を採集して研究」した實證的な學者であつた。なほ彼は本草學の泰斗であると同時に、その主著「庶物類纂」は實に本邦物産學の大集成と呼ぶべきもので、この方面でも學問上の出發點を劃した注目すべき重要な人物なのである。

かくて若水によつて拓かれた本草學、物産學は、偶々將軍吉宗の増産政策に時を得て俄に開花するこ

となつた。即ち若水の門人野呂元丈は昆陽と共に命せられて長崎に赴き、和蘭本草學を脩めてその始祖となり、又本草家の各地に採藥を命せられる者引きも切らず、殊に阿部將翁の如きは、享保十四年遠く松前蝦夷地に迄採藥するに至つた。同十九年幕府は諸藩に產物目錄の呈出方を命じた爲、元文年中にかけて諸國の「產物繪圖帳」が編成され、物產學また急速の發展を遂げたのである。

この本草物產研究の發達に伴つて起つたものに、寶曆七年將翁の門人田村藍水の創始に係る藥品會・物產會の催しがあつた。この催しは、これ以後中川淳庵・田村元長・宇田川玄隨等の和蘭本草學徒によつて發展せしめられたが、中に就て藍水の門人鳩溪平賀源内は、縁を權力と金山とに結んで、物產學を經濟的に實際化しようとして企てた點に於て特に注目せらるべきである。

以下少しく源内の事蹟について考へて見よう。傳へられる所によれば、源内が藩主高松侯の許を致仕したのは、江戸の奥醫千賀道有の手引きで、田沼意次の知遇を得てゐたからであるといふ。高松藩の記録を見ると、御切米銀十枚四人扶持の藥坊主格平賀元内は「醫業師匠も老格に付此節晝夜手に附踏込脩業仕度存意の趣」を内々御耳に達したので「格別の思召を以て」寶曆十一年九月二十一日「永御暇下され」たとある。^(一)いま、恐らくは口實に過ぎなかつたであらう師匠老格云々の眞意を忖度して見れば、齡三十四を數へ學才亦漸く熟した源内は、徒に小藩中に老い朽ちるを懼れて、身を天下の檜舞臺に躍らせるため、出で、三都に「踏み込」まうとしたとでも言へやうか。偶々京で見知つた富豪三井氏を擔がう

として果たさなかつた逸事の如きも、田沼の權力に加へて金力とも結ばんとした彼の意圖を物語るものとされやう。

かくして東都に來つた源内の試みた事業として先づ注目すべきは秩父山中に於ける採鑛・炭焼のことである。即ち寶曆十四年に秩父の中津川で石綿を發見し之によつて例の燃えざる布火浣布の創製に成功した彼は、ついで山中に金銀銅其他の鑛産のあることを發見して、その採掘を目論んだ。特に源内が力を注いだのは鐵で、彼は此處で得た鐵を以て新錢を鑄造し、田沼の改鑄事業に一役を演じようとしたのである。そして秩父から鑛産を運搬するため、荒川に川船を通せしめる計畫迄建てゝゐた。この源内の鐵錢鑄造願出の事が知れた爲、世上の錢相場が急落したと言はれ（續淡海）又彼自身「私數年願望の秩父鐵山も成就仕、追々生鐵・鋼鐵共澤山出、且刀劔にも爲^レ作候處、無類の鋼鐵にて利劔を鍛出、先日より田沼君へ差出置候、近々御樣^{（用）}させ被^レ下候筈に御座候」と大きな希望と抱負を以て事を進めてゐたが、結局は「鐵山の儀は和漢蠻國古今未曾有の珍事に御座候、乍^レ去いまだ吹方手に入不^レ申大に苦み罷在候、吹方さへ成就仕候へば」また「秩父鐵山の儀いまだ吹方熟不^レ申行兼候」と肝心な精鍊技術の未熟の爲に、折角の大計畫も畫餅に歸して了つたのである。^{（三）}安永二年秋田藩に招かれた源内がエレキテルや洋畫で人の畏敬を集めながら、阿仁銅山の増産に參與するや反つてその實際に疎いのを暴露したことは、人の知る逸話である。畢竟鑛山に關する限り、彼自身が或時は「古今の大山師に相成候^{（三）}」と言ひ乍ら、ま

た或時は「私共素人故見落候品多扱々可惜事に御座候^(四)」と言つてゐる通り、山師と素人との境を彷徨してゐたわけであらう。

尙ほ此の方面での彼の計畫として注意すべきものに、明和八年五月附の「陶器工夫書^(五)」がある。即ち是より先き寶曆二年初めて長崎に遊學した際、南蠻支那の美しい焼物を見て、歸郷後その手法を採入れ源内焼を作つた彼は、再度長崎に來遊するや、上記の建白書を草して、郷里で育てた職人を呼寄せ、天草深江村の土を以て製陶し、以て陶器の輸入を食止めるのみならず、行々は之を海外に出して交易に資せんと目論んだのである。建白の一節を次に引いて見よう。

「平戸焼など隨分奇麗ニハ御座候得共、いまだ俗ヲ離れ不申候、今利、唐津ハ勿論ノ儀ニ御座候、今少ノ事ニテ風雅ニ相成候共、片田舎ノ職人共故、古々致來候ヲ、漸仕覺候迄ニテ、新ニ工夫所ハ不參、譬唐物阿蘭陀物を傍ニ置寫候テも、心ニ風流心無御座候故、自然と下品ニ相成候、畢竟天草ノ焼物土ハ、南京焼、阿蘭陀焼ノ土々も、拔群宜御座候共、形不風流ニ御座候故、日本人外國物ヲ重寶仕、高價ヲ出候、若日本ノ陶器外國ニ勝レ候得ハ、自然と日本物ニテ事足り候、尤近キヲ賤ミ遠キヲ尊ビ候ハ常ノ人情ニ御座候得共、既ニ刀、脇差又ハ蒔繪物ノ類、日本ガ萬國ニ勝レ宜御座候故、日本物ニテ事濟候、陶器も日本製宜さへ御座候得ハ、自然ト我國ノ物ヲ重寶仕、外國陶器ニ金銀ヲ費シ不申、却テ唐人阿蘭陀人共も調歸候様ニ相成得ハ、永代ノ御國益ニ御座候。」

陶器に着目した勘の鋭さや民藝觀なども窺はれて興味深いが、國產を増し、之を以て異國と交易して國益と爲さうとする彼の意圖には、特に注目さるべきものがある。以上の源内の事績乃至計畫である採鑛、國產增強及び異國交易を綜合して見ると、たゞ對象が蝦夷地であるか否かの相違を除いては、工藤平助の風説考の所説と全く符合するのを見るのである。

では流石の源内も、北は足跡を留めた秋田に限つて、遂に蝦夷地に着目し得なかつたのであらうか。決してさうではない。元文初年の作と思はれる著者未詳の「蝦夷松前島」を繙くと、その卷首に

「此書何人の作たることを知らず、或人の祕し置れしを只管にこひ得て是を閱するに、地理人物より山川物産言語等に至る迄予が先きに聞ける所と同じければ、僞書にあらざるものならしとかりに寫し畢ぬ。」

との明和元年八月附の鳩溪山人の序文が見られる。^{二六}之によれば、彼の蝦夷地への關心はこの時よりも更に遡るのであり、此頃では「只管に乞」ふて祕書を見せて貰ふ程の熱心さを懷いてゐたわけである。しかもこの明和元年さへもが、かのハンペンゴローの通告より七年を先んじてゐることを思へば、あり餘る源内の才智に驚かすには居られぬ。たゞそれが單なる關心の域に留まつたか否か、之を今俄に斷ずることが出来ない。曾て江戸研究家三田村鳶魚翁は、原稿乃至請負仕様書を窺見せられた爲とする源内殺人事件の通説に飽足らず、牢死後四年目の天明二年春に刊行された「風來山人紅葉金唐革」の一節

「爰によしつねの近臣ひたち坊かいぞん、今は仙家に入りて殘夢と改名し、風に乗じて變人が一間に
いり、イア／＼變人、我君より御文と渡せば受とり、耳に口しめし合して立歸る、跡見送て風來變人
釣どうろうの明りをてらしよ、む長文は、ゑぞ國よりゑぞ國のよふな文言に、金の無しんの跡や先、申
兼たではかどらず、こいつはたしかにいろ事か、めくりの趣向か、うらやましく米屋のでつち三太
郎、やねの上よりのぞき見る、すがたのうつる手水鉢、互に見合水かゞみ、まさしく曲者ござんなれ
と心きゝたる變人、風でつぽふに風こめてきつてはなせば、三太郎はかた先うたれて眞逆様、起しも
立ずぐつとねめ付け、密書を伺ふ三太郎、なんぢくせものに極まつたり……ヤア扱うぬらは重忠の廻
しものであつたよなア、三太郎と云しも偽り、きやつも慥に廻しもの、本名を明かせといわせもはて
すホ、廻しものとは、よいすいりやう、米屋のでつち、でう六か、四三をさとり且那の家來、ぬかで
も丁めのとりこみせうぶ、三郎五六といふ兵もの、ゑぞ國へ通路なす、さいせんの書狀の様子、やね
から一方片目おろしとにらんでおゐた、のがれぬ所だ、うでを廻せ／＼と、三人鼎におつとりまく。」

○濁點
筆者

によつて、「見られて直に拔刀を出す、刃物などには極めて縁遠い鳩溪、それが人を殺す、餘程苦しかつ
たのであらう、自他の命を懸ける書類、これを蝦夷の密貿易と睨む」と推量せられたことがある。果し
て當つてゐるかどうか、判斷を下し得る資料を持たない。たゞ鳶魚翁が氣附かずに居られるらしい、上

の引用文中に「四三をさとり且那」とあるのは、被害者の一人の主人たる勘定奉行松本伊豆守で、天明度蝦夷地調査の大立物松本秀持その人であることを、茲に補つて置くに止めよう。

「凡天地の物を生ずるや、鳥獸魚蟲の類は、羽あれば手なく、角あれば牙なく、燒事もなく煮る事もなくして、造化のまゝに是を食す、象は鼻を以て箸とし、鷺は爪を以て庖丁とす、林に住鳥、足の踏分なるは、木にとまりて食を求るに便あり、鷺の足の長きは、泥鰌を踏に勝手なり、梟の夜歩行、蛙の長寝も、皆夫々の食物あり、人は是に異なり、半は造化に出、半は人功に依て是を喰ふ、故に稻に飯はならず、蠶反物を吐ず、網に濱焼はかゝらず、是人は羽なく、嘴なければ共、萬物の靈なるが故に、智といふものありて、さまざまの器を作り、自ら是を製して食す、鳥獸の造化のまゝに喰ふに異なり」

これは源内が安永八年正月に「金の生木」の一節で漏してゐる感想の一端である。上來述ぶるが如く、源内の事業並に計畫には、清新に添ふ未熟、積極に伴ふ粗放を否むことが出来ぬのであるが、然しその凡てを貫いて流れる信念こそ、戲言の外貌の中に吐露された、この智性への確信であつた。それは、昆陽に於て洋學と結び附いた仁齋以來の實證的學風が、醫學本草物産の溫床中に伸長せしめた自覺に外ならず、従つて、智を以て人間を禽獸から分つ所以のものと斷定したこの源内の言葉は、幾多篤學者の業績の上に打ち立てられた貴重な宣言と見らるべきである。畢竟、源内の所謂山師的生涯は「物類品隲」

「會藥譜」「番椒譜」「紀州物産志」等の編述に見られる本草物産學の蘊蓄と、火浣布の創製・寒暖計の模作・エレキテルの製作・平線儀一種の水準器の作成等に窺はれる科學的素養とに支へられ、右の如き智性への確信に貫かれたものであつたといへる。

源内が蝦夷地の密貿易に關與してゐたとの推測の當否はともかく、彼の蝦夷地への關心は、門下の一
人によつて立派に具現せられたのである。天明五年の蝦夷地調査に徳内の隨行した青島俊藏政教が、即
ちその人である。徳内とは同門の、本多利明の弟子である數學者會田安明は、隨筆「自在漫錄」の中で
徳内の事蹟を記るしつゝ、政教のことに及び、

「殊に青島俊藏は元松本伊豆守の家來にて、平賀源内と云ふ儒者の弟子こゝちなり。」
と言つてゐるのである。

その頃御普請役見習の職にある微祿の小吏であり、しかも五年後の寛政二年に、前年國後蝦夷反亂の
實相密索の命を帶びて再度渡島した際松前藩に内々助言を與へたとの廉で遠島の刑に處せられ、流刑に
先立つ八月十七日、四十歳の生涯を獄中に終へた不遇の人青島俊藏のことゝて、その經歷事績の如きも
素より之を詳かに知るべき筋とてない。たゞ草間伊助の「三貨圖彙」(一名古今貨幣圖説)の末尾に近い卷三十四
に、政教の筆になる「光被錄」の收録せられてゐることは闇夜の一燈にも等しい。彼は書中に「予いに

しへ天明二寅の秋より崎陽に在役して」と言つてゐるから、元來勘定所詰の御普請役下役あたりから勤め上げたものと推測出来る。長崎在勤中、金銀銅の如き「吾邦有用の財貨」が、外國貿易によつて國外に運び去られるのを惜み、新井白石の「寶貨事略」、佐久間東川の「天壽隨筆」の後を承けて、明和二年以降天明三年に至る十九ヶ年に流出した棹銅及び銅錢の量員を數へ、一方唐紅毛から持ち渡つた金銀銅の數量を記した上、口を開いて一家の言を爲して云ふ、來朝する所の商客を按ずるに、金銀を携へ來つて銅又は海產物と交易するに徴しても、「あながちに國益を重んじ論ずる輩にあらず」、たゞ「商價の利益を貪るのみ」と思はれる。思ふに我朝の銅産は、必ずしも豊富とは言ひ難い。故に銅を現状の如く彼等に渡しては、「星霜久しからずして國々の出銅衰滅せん」、當に「力を盡し心を用て」、海產物、木製器、絹布の類を増産し、銅に代へて之等を交易の資に宛てるならば、商利をのみ望んで來る外商から金銀を吸収すること難きに非らざるべしと、これが「光被錄」に於ける政教の論旨である。(二二)

御普請役とは、その名の如く建築作事を司るのみではなく、田畑の開墾用水の開鑿から物産交易の事に至るまで、勘定奉行の下で財務を掌る役儀であつた。小吏乍らこの職務に忠實であつた政教は、恐らく國産の増強を實現すべき技術を學ばんとして源内の門に入り、蝦夷地に對する關心をも授けられたものであらう。本多利明が彼を指して「幸と前以知る人」(二三)と呼んでゐる所を見ると、政教は交りを廣く物産家と結んで知識の擴充に力めてゐたものと思はれ、氣鋭な少壯幕吏たるの風采が偲ばれる。

斯の如く、政教は物産の増強による國富増進の道を學ぶと共に、その學習の裡に、學問の基底たる精神を會得する所があつた。

「天明五年乙巳春、吾儕小人、臺命を奉じ、同三月松前に到り、道を分て島中を巡行する也、松前に屬する民村七十餘、其の他を蝦夷地と曰ふ、一に皆漁を業とし、耕するを知らず、竊に夷人の情を察するに、商人の爲に利を掠めらるゝを怨み、又自ら耕するを知らざるを悲しむ、而して清化を希ふ也、臣等仁風を敷き、齊しく清民と爲さんことを願ふ。」

これは天明五年蝦夷地調査隊一行の連名になる「蝦夷拾遺」卷頭の、天明六年十一月附の序文である。連名ではあるが、その實この書が政教の筆に成るものであることは、會田安明の記述によつて知れる。

蒙昧の境にある蝦夷に「仁風を敷き、齊しく清民と爲さんことを願ふ」この立場こそが、後述する師利明の教訓と共に、従者徳内の「蝦夷草紙」を孕んだ最も重要な母體を爲してゐることを思ふ時、政教を育て、之を蝦夷地に送つた平賀源内の、天明の調査、ひいてまた徳内の著作に映る色濃い影を、何人も之を否定することが出来ないであらう。

四

さて、徳内の師本多利明は、源内と頗る相似した學者であつた。まづ「金の成木」に對應すべき言葉

を利明に求めると、「經世祕策」の中「國務總論」の冒頭に次の様な一節が見出される。

「當時の國務に前務あり、後務あり、本首あり、末尾あり、此前後の首尾貫通して、而後興業に企ざれば決して成就せず、其前後本末の首尾貫通は、何に縁てか明白にせんとならば、則算數の道なり、算數を以て基となし、天文、地理、渡海の道に透脱し、何一闕目なき様にせざれば、物毎に差支ることのみ多くして、何事も末遂て相續することなりがたし。」^(二四)

源内が本草學から物産の研究に進んだのに對し、關孝和高弟今井兼延に數學を、千葉歲胤に天文學を學んだ利明は、この算術天文の素養に立脚して同じく物産を嗜んだのであるが、智性への確信に關する限り、二人の間には何の異なる所もなかつたわけである。

更に源内が秩父で金鐵の鑛産に従事したのに對して利明が伊豆の焰硝を試みたのも好く似てゐるが、源内が秩父で精鐵の術に熟せず、阿仁で製銅の實際に疎かつたのと和して、利明も亦生銅からの金銀抽出に自らの膽を冷してゐる如きに至つては、寧ろ苦笑を禁じ得ない程である。それと言ふのは、我國が輸出する棹銅の中には抽出可能の金銀が含まれて居り、遺憾に堪へぬとかねて考へてゐた利明は南蠻祕傳の製銅業者住友家の技術を探索したところ、見るべきものゝないことを知るや、一層その見解の獨創さを誇つてゐた。その内心の得意から酒間に不用意に雜談したのが水戸侯の耳に入り、實驗を命ぜられる事となつた。利明としては理論的な事實として主張してゐたに過ぎなかつたと見え、この命令に接

して頗る狼狽し、「其業仕るべき段仰付けられ、大驚御免願ひ奉るべくと存じ奉り候へ共、何事も天命の歸する所と」悲壯な覺悟で承知したが、さてその實驗の結果は「少々は出金もこれ有り候へ共、少々にて指金なと云奸術等にも響き、宜しからざる儀もこれ有るべき哉と」「一向出金出で申さざる旨」の報告に及んだ。そしてこの結果を聞いた水戸侯が異國交易の銅に惜み少くて良いと反つて満足されたといふので「危難の所天運竭きざるや……先づ安堵仕り候」と胸をなで下してゐる利明である。^(二五)

この様な源内、利明の科學力の眞價は暫く措き、猶二人の共通點を見て行くと、源内の陶器工夫書に現はれた國產增強と外國貿易の説こそは、利明が最も力を入れた所であつた。即ち天明三年の大飢饉の慘狀を奥州で目撃した體驗、及び人口の増殖と土地の生産力の擴張との不均衡に關する算術的推論から、人爲的な生産力增強の必要を痛感した利明は、「自國の力を以自國の養育をせんとすれば常に不足、強てせんとすれば國民疲て、廢業の民出來して大業を破るに至る、爰を以他國の力を容ずしては、何一つ成就することなし^(二六)」と言つて眼を異域に注ぎ、茲に「自國の產物を用て外國の金銀銅と交易し、利潤の金銀銅を得るの外なし」との外國貿易論に到達した。その場合、「日本は海國なれば渡海運送交易は固より國君の天職最第一の國務なれば、萬國へ船舶を遣りて、國用の要用たる產物及び金銀銅を抜き取て日本に入れ、國力を厚くすべきは海國具足の仕方なり^(二七)」と貿易の官營たるべきことを力説する。では交易の素材たるべき「自國の產物」はどうして增強するか。利明は當時の通説たる新田開發を無視したので

はないが至極之に冷淡であつた。鋭敏な彼は工業の發達に着目したが、それを實現すべき立案を得る程には熟してゐなかつた。かくして利明に残された方策こそ、蝦夷地の開拓に外ならなかつたのである。

即ち此の地の「金銀銅鐵を掘採て國力を厚く仕」、「開發の功に因て百穀百果も逐年に潤澤に相成」、「大樹の良材なる土地に御座候得は、御材木運送し長器船舶之新製等意の儘となり」、「天下の國産を意の如く運送仕」り得べく、斯く蝦夷地の開拓成るときは、引いて「北敵防ぎの御要害」となり、又開拓者に罪人を充つれば「御仁政に相成」るべし、と彼はその功用を説いてゐる。^(二六)そして利明は慎重にも筆を此の程度に留めてゐるが、彼の眞意は、蝦夷地の鑛産農産を、その地の材木より造りたる船舶に積んで官營の異國交易を試みんとするに在つたのであらう。さうでなくては、彼が生涯を打ち込んだ造船航海の術の生き様がないからである。

利明はこの蝦夷地開拓の成功に確信を持つてゐた。その理由とする所は至極簡明であつた。即ち、西洋の地理を學んだ彼は、歐洲列強の北緯度數を計つて、「天下萬國の内にての大豐大剛國」たる「モスコヒヤの都は六十度なり、和蘭は五十三度なり、フランスは五十一度エゲレスは五十二度より六十度に距る」を知り、茲に文化は一般に高緯度の地に發達するとの原則を推理し、さて松前所在島^{○北海道}は周廻の海路凡一千里弱^{三十六町一里之積}北極高四十度より四十三四度の間に所在なれば、支那の順天府の氣候にひとしく最以良國なり、カムサカスの南方の地端北極高五十一度なれば、東蝦夷之地^{○千島}何れも四十度より五十

度の間に所在の島々なれば、五穀百果豐熟之良國となるべきは、北極出地に依て慥なり、既にフランダ都城所在、北極高五十三度二十三分之土地なれども、歐羅巴に雄長たる良國なるを以證據とせり、北極高度を以て土地の寒暖を知、五穀百果之豐熟不熟を知事開業第一の證據とせり、フランダを以て蝦夷諸島之良國となるべきことを推て知べきなり」と斷定してゐる。^(二九)利明はこの緯度による蝦夷地開拓の可能

を、彼の凡ての著作の中に繰り返して述べて居り、彼にとつて動かすべからざる確信となつてゐた。然るに當時言を爲す者あつて、蝦夷地は雲霧深き濕地にして日本人の居住に適せず、強て居住するとも五穀生ぜざれば食物に乏しく、濕氣と相俟つて發病廢人に歸すべし、彼地の廣大未開なることは人よく之を知れども、斯かる實狀の故に空しく放置せられたるならんと言ふ。之に對して利明は、かゝる言説は「蚤くいへば我朝の不幸の甚しき也」と言ひ、雲霧の深いのは事實であるが、之は「土地に人民乏しくして耕作の地面無故、山岳曠野悉く大樹或は柴草繁茂せしゆへ、是に覆はれ、地面の陰冷の濕氣太陽の溫熱の乾氣各霄壤に升降せず、地面に屯鬱する故」であるから、春の末頃風強い日を選んで廣く火を放ち、草木を焼き拂つて太陽の炎熱を正眞に大地に稟けしめれば、地濕は大空に上昇して雲となり、雲彌、積重すれば終に雷電生じて雲霧一時に退散し、快晴を見るに相違ない。茲に於て流水を招導し、井を掘り溝を穿つて用水の便を計り、田畑を墾耕して百穀を蒔けば、良い田畑を得るは必定である、かう利明は確信を以て説いてゐるのである。^(三〇)

天文算數物産の學を身上とする利明は、以上の如き「單純ではあるが徹してゐる」合理的判斷を積んで、蝦夷地開拓の説を唱へ、異國との交易を主張して止まなかつた。そして若年の頃幾度か渡島した經驗はあるものゝ、未だその地の實狀を知悉し得なかつた彼は、天明五年幕府の調査に便乗して、知識の充實に資せんとし、門人徳内を派遣するに至つたのである。謂ひ換へれば、徳内はその様な師利明の意を體して蝦夷地に渡つたわけである。

最上徳内が最初に身につけた素養は醫學であつたらしく、江戸に上つた當初醫家山田宗俊の學僕になつたのもその爲と察せられる。尋いで利明の許で算術と天文地理とを學んだ。彼が蝦夷地に竿取として赴いた際「天文地理の心得」によつて珍重されたことは、上載利明の上書中に見える通りで、なほ彼はこの行中土地の緯度を計り、地圖の製作にも従事してゐる。之に加へて、文化元年三月の「度量衡説統」六卷の著述、「八線眞數表」「八線對數表」「加減代乗除法」の刊行豫定の如き、彼の科學的業績は、利明の門人として當然のことであるが、彼がまた文化九年以降八王子に於て漆の栽培並に蠟の製造に従つてゐる事實は、^(三)その物産學上の事績として特に注目せらるべきである。この後文政九年には、有名なシーボルトとの交渉を持つに至るのであつて、利明から授けられた科學精神が彼の全生涯を貫いてゐることを如實に物語るものといふことが出来る。

五

天明度蝦夷地調査を慫慂し支持した物産學の實體は、右に例示した如き源内・利明の事績論策の中に明瞭に現はれてゐる。即ち源内の精鐵精銅、利明の精銅開墾に見る通り、彼等の科學は之を企業的に成功させるにはまだ程遠い未熟なものであつた。それにも拘はらず彼等が進んで山師となり建築家となつた理由は何であつたか。純粹の學究たるに甘んじ得ない個人的性格とか、啓蒙期特有の若々しい情熱とかは今之を措くとして、彼等をして安易な自己満足に陥り一層の研鑽を放棄せしめた一般的水準の低さと、彼等の科學をそれ自體としてではなく、その功用の面に於てのみ求めた時代の要求とが、その主たる原因を爲してゐたと思はれる。それを別な面から言へば、科學の眞正な發達を支持すべき社會的地盤の形成が、當時未だ存在してゐなかつたといふことである。

利明の經濟思想を解説せられた野村兼太郎博士は、彼の「思想的傾向」として現状への不滿といふ點を指摘せられてゐる。^(三三)その示唆する所は何であらうか。

今試みに、徳内の時代に到る迄の蝦夷地關係者の身分に一瞥を加へて見よう。まづ初めて蝦夷地の開拓を唱へた上述の並河天民は鳥羽の米商の息子で材木商伊藤仁齋門下の京都の町學者であり、元文元二年の間に蝦夷地の金鑛採掘を試み、後ち同四年「北海隨筆」を著して開發の卓説と蝦夷の實狀とを書き

殘した坂倉源次郎は後藤庄三郎の手代たる江戸金座々人であつた。^(三三) 降つて安永七年松前に來つて藩主に

墾田を勧めた平澤元愷（號旭山）は四方を周遊した遍歴の文章家で、新村出博士の評言に「旭山の本領

は文章と漫遊とに存し、子平の如き憂國の氣概は彼に認むる能はざる所、文章にありても經學にありて

も洒々落々、その主張もその唱説も必ずしも固執せざりしが如し」とある。^(三四) 「風説考」の著者工藤平助

は祿三百石を食んだ仙臺藩の侍醫であるから、身分の上では一頭地を抜いて高い。尤もその略傳を見る

と「少々にして大志あり、然れども一人の力能く及ぶ所にあらずと、是に於て廣く師友を四方に求め」

ひいて食客常に絶えず、中に博徒の交るもあり、「曾て管見録を著して當世の急務を論じ」その政治的才

管を買はれて蓄髮政務に與り、「然れども持論専ら公平を主とし、時に權變に涉ると雖も、概ね時俗に迎

合せず、爲に言ふ所は什の一も行はれず」とあるから決して三百石の祿に安じてゐた人ではない。次

に松本伊豆守から諮問をうけた土山宗次郎孝之は御勘定組頭を勤めた微祿の幕吏であるが、後に越後買

米瀆職事件の首魁者として死罪に處せられてゐる。又宗次郎と深い關係があり、その處罰せられた際に

も一味として罪に問はれた「東遊記」の著者平秩東作^(儒名立 松東蒙)は江戸四谷新宿に稻毛屋を名乗つた煙草商

で、その著「葦野茗談」の跋に鈴木白藤が「此東作大に才略ありし者なりしが、所謂山師也」と記るし

てゐる。^(三六) 尙「三國通覽圖説」「海國兵談」の林子平が慷慨の庶士、天明八年渡島して「東遊雜記」を著

はした古河古松軒が名高い旅行家、同年以來寛政四年迄滞在して「蝦夷喧辭辨」其他詳細な多くの日記

を残した菅江眞澄^(三七)が一生を旅に委ねて常民の生活を記録して歩いた遊歴の文人であることは、知らるゝ通りである。更に寛政元年福山に來遊して漢文體の地誌「蝦夷風土記」を物した新山質は、上述の平澤元愷の門人で、葛西因是の名で知られた浪花出身の江戸町學者である。^(三八)また「地北寓談」「北地危言」を著して、寛政十一年の蝦夷地直轄の動機を作つた大原左金吾は、放蕩に郷士の生家を逐はれた流浪の處士であつた。^(三九)そして最後に、平賀源内は上記の如く御切米銀十枚四人扶持藥坊主格の身分を棄て、江戸に出で、「御めしつぶへ頂戴不仕候」と仕官を峻拒し、田沼を初め諸侯に智恵を切賣る一方、自ら「毎々淨るりニも助られ申候」と言つてゐる通り戲作の稿料も活計の資とした浪人學者であり、^(四〇)本多利明は十六歳の文化六年加州侯から合力米二十口を給せられた外には仕官の經驗を持たない「武州江戸浪人、天文蘭學者」^(四一)であり、その門人最上徳内は之また上述の如く出羽の百姓甚兵衛の子で、志を立て、江戸に出で醫家山田宗俊の學僕となり、蝦夷地の體驗を買はれて寛政二年初めて御勘定所詰御普請役下役に採用された後、御普請役元格、箱館調役並と異數の立身を遂げた五十四歳の文化五年が、その祿高漸く百俵三人扶持に過ぎなかつた。^(四二)

以上列舉した並河天民以下最上徳内まで十四人、町人に非ざれば小祿の幕吏であり、町學者に非ざれば流浪の處士周遊の文人であつて、そこに強弱濃淡の差こそあれ、孰れも皆當時の幕藩體制から逸脱した人々であつたことを知るのである。蝦夷の研究、蝦夷地の開拓は實にその様な人々によつて推し進

められたのであり、本多利明に認められた「現状への不満」の由つて出づる所も自ら理解せられるであらう。

それと同時に、此等の人々の地位を思ふ時、新しい思想、新しい學問を積極的に生み出すだけの社會的地盤のなかつたことが痛感せられるのであつて、利明や源内が幕府や諸侯への建築に急にして研鑽の途に専らであり得なかつた原因も其處に歸せられるのである。そしてその反面には、その様な恵まれない環境に於いて敢えてせられたゞけに、新しい思想學問を單なる斷片的知識としてゞはなく、智性への確信の下に之に全身を打込み全生涯を委ねた彼等の眞理への愛が、皎々たる輝きを以て光つてゐるのである。彼等が民族學の先驅者たる榮譽を擔ひ得る所以のものも、源に遡ればこの眞理への純乎たる愛に發してゐると言ふことが出来る。

六

こゝで今一度本多利明に立ち戻つて、彼の蝦夷觀を聞くことゝする。

「人の品に凡三等あり、衣食住に係る所のものに、闕る物なき土地を都會といひ、闕る物ある土地を田舎といひ、其甚きに至る土地を蝦夷と云なり、皆是人道の整と不整により、都會となり、田舎となり、蝦夷となりて、三等に人物居れども、悉皆神武帝の遺裔なれば同種類なり。」
(四三)

これは享和三年の「長器論」の冒頭であるが、是に依れば、文化史的觀點に立つ利明は、未だ都會・田舎に至らざる未開の地を、従つてまたその住民を蝦夷と呼んだのであつて、等しく皇祖の遺裔としての間に人種的な差別は認めてゐなかつたわけである。實際彼は蝦夷も亦日本人であるとの説を繰り返し力説してゐる。茲には寛政四年の上書の中で

「土民共の稼穡之儀は、春夏秋之間は漁業仕、冬は禽獸狩仕、魚類禽獸之肉を以本食と仕、(中略)誠に禽獸同様の境界に罷在候儀は不便千萬之有、様に御座候、左候得共土民は不殘日本人之種類に御座候、左様に御座候故漸々と日本風俗を流布させ、漸々國政も相立、撫育教導仕候は、後々は良民と相化し、良國と可罷成と奉存候。」^(四四)

と記してゐるのを一例として擧げるに留めよう。

では何を以て利明は蝦夷も残らず日本人と同種族であると見爲したのであらうか。寛政元年の「蝦夷拾遺」を見ると、「緞令夷狄たりといふ共、元は日本人の種類なれば、明君出てこれに明吏を與へ撫育教導をせしめ、渠が困窮の堪へ難きを省き、善惡邪正を糺明し賞罰嚴密にあらしむるにおゐては、終に良民となるべき也、しかるを夷狄といへば、實に獸類のごとく思ふもの多きは、愁ふべきの甚しきなり」との確信を繰り返した後に續けて、次の様な記述を試みてゐるのである。

利明は壯年の頃、熊谷次郎直實の故郷を尋ねたことがあつた。直實の子孫は武勳兒玉郡の中に元熊谷

村といふ所に住んで百姓の長をしてゐたが、聞く所によれば、此の村などが關東から奥州にかけて初めて開けた郷であつて、「夷狄變じて人間となりたる最初の郷里なり」といふことである。然し源頼朝の時代までは關東から奥州に亘つて家屋を建てることなく、皆塚又は岩屋に住んでゐたのである。その證據には、現にこの邊りの日當りの良い山際には數千の古塚が並んで居り、近郷みな同様である。其等の古塚を掘つて見ると、塚の内部は四方を小石で垣とし、柱桁も棟梁もなく、只屋根石として天井に一枚石を葺いた上に土を盛つてある。外見は圓堆形をなしてゐるが、その屋根石は青眞岩であつて、幅八九尺長さ一丈餘り、厚さは五寸から八寸程の、性至て密又美しい自然石である。里人に聞けば、この様な石は近在には出ない故、遠方から持ち運んだに相違ないと言ふ。この種の古塚古岩屋は下野の結城、常州、奥州白河邊りにも澤山残つてゐる。我國上古の風俗は是等を視て考へ知るべきことである、と。(四五)

この一條は明快な文章で鳴る常の利明に相似はしからぬ難澁な文脈で書かれてゐるので、右の様に判讀して置いたのであるが、彼が此處で言はふとしてゐるのは、今日立派な村落となりおふせてゐるこの邊りも、嘗ては里人皆塚や岩屋に穴居した夷狄であつたのであり、この實例を以て推す時は、今は禽獸の如き生活に沈む蝦夷も、撫育宜しきを得れば明日の武州となるに相違ない、といふ點に在るのであらう。

利明が實見したのは吉見の百穴でもあつたであらうか。あの邊りなら横穴など幾らもあるであらう。

う。今では古墳と認められてゐるそれらの遺蹟を、彼は蝦夷穴居の址と考へ、それらの蝦夷が文化の潤澤によつて今日の住民となつたと推測し、そこに蝦夷と邦人との同種論の根據を置いてゐたわけである。

この推論の仕方は如何にも智性の人利明に相似はしいが、あたかも彼の科學がさうであつた如くに、この場合でも、たゞそれだけの理由で蝦夷と邦人との人種的な同一さを斷定し、以て蝦夷地開發の實際的施策に結び附けようとする邊り、彼の學問の緻密を缺いた未熟さが見逃せない。尙ほ北米上人について「土人毛髮黒く腫黒く、中背にして我國の人物と異なる事なしといへり」と聞いて、その地理上の位置を考慮に入れた上、「往古より蝦夷の土人漸々傳移増殖せし歟もしれず、何れ我國の人物と同種類なれば、我國より撫育介抱して、屬國となすべき土地なり」と言つてゐる如きも、勿論人種論をしようとしてゐる箇所ではないとしても、矢張り同様な卓見と粗雑さとから免れてゐない。

右の通り、粗放未熟ながらも、利明は一應考古學的な立論に據つて蝦夷と邦人との同種なることを信じ、之を撫育開明しようとしたのであるが、その場合の彼の方針は、これも「蝦夷拾遺」の中で

「土民撫育教導の制度は、其土地に是迄用ひ來りたる禮儀あり、此内の宜敷を撰採りて日本の法令を以て保助せしめ、蝦夷土地に都て長者といふて長夷あり、是を直に鄉村の名主或は庄屋と役名を給はりて其鄉村に賞し、法令をこれに布傳へ、土人に天監使を給はり、民間曆を制作し博く國中に頒布あ

らば、後々は人道に染り、良民となり、良國となるべきなり、彼地いまだ佛法の沙汰なし、依て是を幸に斟酌あるべし。^(四七)」

と言つてゐる通り、先づ固有の慣習を尊重することを前提として、漸進的に是に文化を滲透させようとするにあつた。

「本多利明ニ問フテ曰ク、蝦夷ヲ導クニ其レ何スレバ可ナリヤト、利明曰ク、允ク仁ナレバ則チ天ノ祚アリト。」^(四八)

これは徳内の養子鐵五郎が「家大人小傳」に載せてゐる師弟の問答であるが、徳内の蝦夷に對する視角は、上述の如き利明の立場を承け繼いだものであることを知らねばならない。

七

茲で蝦夷地並に蝦夷が當時どの様な事情の下にあつたかを一瞥して置かう。まづ松前藩の統治方針の大綱は、夙に慶長九年正月廿七日附家康の制書に記るされた(一)他國商人の蝦夷との直賣買の禁止(二)無斷渡島の禁止(三)一般に夷人虐待の禁止を墨守することにあつた。そこで藩では慶長年中の現状によつて、和人夷人の雜居する東は龜田から西は熊石に至る地域を境として、北を蝦夷地南を松前と定め、住民の猥りに境界を越えることを禁じた。この様な施策は一應蝦夷を保護安住せしめる方針で

あるかの感を懷かせたが、その實體は遠からずして暴露された。

一體米産のない松前では、藩士への知行は特殊な形態を執らざるを得なかつた。そこで蝦夷地を多くの「場所」に分つてこれを給與し、また和人地の幾分を割いて與へ、小祿者には稟米を支給した。そして殘餘の場所は殿場所と言ひ、和人地の大部と共に藩主の直領とせられた。この際注意を要することには、藩士が場所を給與せられても、その有する權利は、年に一回介抱と稱して蝦夷の好む品を積んで知行所に至り、酋長と交歡した上、土産物の形式で産物を得て歸る、たゞそれだけの事であつて、漁業伐木採金等の權利は一切領主の手に留められてゐたのである。

然るに、この北邊の僻地でも内地と同様に藩、藩士とも窮乏に悩まされるに至り、蝦夷の原始的な技術による漁獲高の減少と知行主たる藩士の交易上の不熟練とを補つて、收益の増大を計らんが爲に、商人に運上金を課して場所での交易を請負はしめる「場所請」の制度が行はれるに至つた。この制度の起原は未だ適確に知られてゐないが、凡そ藩が儉約令を布いた享保の頃と推定せられてゐる。但し場所請の行はれた當初は、交易者が從來の知行主から商人に代つた迄のことで、蝦夷への供給品を積んだ船に荷主船頭通詞（藩主の場所へは之に加へて上乘役と名附ける立會の藩士一人）が乗込んで場所に至り、獸皮鮭鱒等と交易する定めで、たゞ回數は年一回と限らず増加したやうである。然るに元文に入ると近邊の場所に運上木屋と稱する漁營場が設けられて、請負商人が蝦夷を使役して漁獵を營むやうになり、

進んで請負が全般的となつた寶曆以後では、蝦夷に前貸しの制まで敷かれて、商人の經營は次第に酷烈の度を加へて行つた。その間には漁獵法の進歩の如き、蝦夷にとつて有益な部面が皆無ではなかつたにしても、藩並に知行主たる藩士が運上金の増額にのみ没頭して、請負商の蝦夷虐使を放任した責任は見逃すことが出來ず、やがてこれが寛政元年の國後目梨蝦夷の反亂となつて勃發し、松前藩の領地召上の一動機ともなつたのである。(四九)

而してこの様な松前蝦夷地の實狀に對して批判的な目を向けたのは、先づ平秩東作であつた。即ち彼は場所持の藩士について

「諸士の風運上金の多少をあらそひ、商人同前の心懸にて節儀甚薄し、甚きものは市中に見世店をもち手代名前にて賣買をなすものあり」

と言つて、その本務に怠慢なることを指摘し、轉じて蝦夷の憐むべき狀態に對しては、同情的な筆致を以て

「蝦夷人は道理につまりぬれば強てあらがふ事ならず、忽ち首をたれて誤り居る也、是正直なる故也、然るに此方より渡る船方の者共物の辨へもなきものなれば、ひとへに愚なりとのみ覺て侮りかすむる事大方ならず、通詞などいふものは松前の役人の様にいひなすものなれば、蝦夷人も敬ひ重んずるを、勝にのりてさまぐの難儀をいひかけ、人中にても大地に引伏せ打擲し踏にじりなどする躰見るに忍

びずといへり。^(五〇)」

と言ひ、未開人の單純正直な心情を愚昧と誤る邪智の不正を憤り、また權威を肩に着て弱者を虐げる横暴にも江戸者らしい俠氣を感じてゐるのである。この東作の見解は、そのまゝ土山宗次郎の報告書中に盛られて幕府當路者の目に觸れた筈である。

蝦夷地に入らず、直接蝦夷の生活に接する機會を持たなかつた東作でさへ、人の語るを聞いたのみで黙止することが出來ず、この様に書き記してゐる程であるから、師匠の利明から、導くに仁を以てせよと教へられ、然も蝦夷の中に入つて暮した徳内にとつて、義憤が東作の域に留まらなかつたのは、蓋し當然のことであつた。

かくして、徳内の「蝦夷草紙」(原顯「蝦夷人情」(風俗之沙汰))は、實にその様な烈々たる正義感に基く松前藩の蝦夷抑壓策への嚴重な抗議に満たされてゐるのである。即ち彼は「其制禁ノ品々ヲ見ルニ皆仁道ヲ齟齬シテ大キニ國民ノ質害トナル品ノミ數多アリ、彼是トモニ時ヲ得バ書ニ顯ハサント思フ處ナリ」と言つて、深くこの問題に立ち入ることを避けようとし乍らも、激情の迸る餘り、「松前家古來ヨリ領内ヲ請負人共に渡シ置故ニ自分領地ノ政事は勿論、境々ノ廣狹モ知ルモノ無シ、蝦夷地ニ侍ハ一人ニテモ住居セザル事也」と一般政情の放任怠慢さを憤り、松前に出稼ぐ商工及び農民に課役しまたその滯留を禁ずるのは、彼等による人口の増加が米價の騰貴を惹起するを恐れるからであるとの藩當路者の説明を聞いて、保身

の爲に蝦夷地開拓の大業を阻んで顧みぬ藩の施策に「辟易」し、又穀物の種子を持渡り、農耕を蝦夷に教ふることに、並に文字を與へ日本語を教ふことを禁じ、更に日常生活にも風俗の日本化するを嚴禁し、甚しきに至つては醫藥をも與へざる實情を列舉して、時に「恥ベキヲ羞ズ、賞罰ノ品ナキ苛政ナレバ評スルニ余リテ呆レ果テタリ」と茫然とし、又時には「余リニ堪ガタキ事共ナリ」と土民を未開の現狀に放置抑壓して、請負商の苛酷な驅使に委ね、自らは心を運上金の多少に専らにする藩の暴政に憤激し、結局「斯アサマシキ國政ニ逢人間モ有ルモノカナ」と嘆じ、己が身に引き比べて「我日本ノ御代ノ有難サ」を感謝してゐるのである。そして自ら「窮ヲ賑ハスヲ以テ先務ト爲シ、國家ノ仁政ヲ明カニ」すると共に、一日も早く「當今ノ時勢ヲ風化シテ人道ニ染マシムル計策」を立て、國力を以てする之が實現を期待して止まぬのである。

八

「夷の氣質正直にして愚也、せわ／＼しき事なく心長くして悠然したる風也、至極の下國にて獸にひとしき態なれ共、心は豊かなるは衣食住が心遣ひなく、金銀通行せざればおのづから利倍の欲なき故なるべし、夫は漁獵をし、女は薪を取アツシを織、家事を勤る事、本邦^(五)は女の心ざし貞固也。」

これは元文元二年に互つて蝦夷地に金山の採掘を試みた上述の坂倉源次郎が「北海隨筆」の中に漏して

ゐる蝦夷觀の一節である。正直にして愚なりと言ひ、心豊かに女の志貞固なりといふ、それは一町人の素直な眼に映つた偽らざる蝦夷の姿であつたには相違ないが、しかしこれは、行きずりの旅人がふと見返つて書き留めたとでもいふ程の、淡い旅愁を伴つた感想であるに過ぎない。

「かしこきやかもひをまつり、父母を慕ひ尊み、妻子はも愛ぐしうつくし、わか草の人妻てへば、眞言をもおほには問はず、もの食へば友に分たへ、酒のめば人に譲らへ、何物もしるし立つれば、盜まへる事もなかりき、書も見ず言も通はぬ、島わさへ斯くしもありて、神世なす素直にも有か」^(五二)

とは「蝦夷に特殊の關心を持つてゐた」賀茂眞淵の「詠蝦夷島歌」の一節である。作爲なき人間性の本然に目覺め、曲巧と粉飾とから免れてゐたと信ぜられる古代の復活を主張した眞淵は、傳へ聞く蝦夷の原始生活の裡に古代精神の存在を認め、そこに限らない感激を寄せてゐるわけである。

それは素より美化された蝦夷である。しかし乍ら、この抒情を支持してゐる所の眞實なるものへの憧憬と愛情とこそが、源次郎から徳内へ至る蝦夷觀の推移の重要な基調を爲してゐることを知らねばならない。

知らるゝ通り、江戸の社會は、變革の全面的否認と現存秩序の絶對的固執とを立前として、驚くべき巧妙な制度を擁してゐた。そして、その結果恐るべき停頓と澁滞とが支配してゐたのである。貨幣經濟の進展が、この機構の埒内に於て、徐々に新しい胎動の地盤を形ち造りつゝあつた。眞淵の覺醒は、こ

の地盤に立つてゐたのであつて、彼が天を覆ふ積雲にも譬ふべき煩雜な作爲のほんの僅な透間を通して、素早く眞實てふ日輪の輝きを仰ぎ得たのも、言つて見れば、その様な普遍的靜止状態に於ける微弱然し根強い社會の動搖を契機とした精神史上の一事件であると思ふことが出來やう。そしてそれが思ひ掛けない覺醒であつたゞけに、眞淵の感激は一層強かつたわけで、その實體のあり方に對する嚴密な反省など之を試みる餘裕を持ち得なかつたのである。彼が蝦夷の素朴雄大な古代精神を想像して詠んだ上述の長歌は、その様な状態に於ける彼の愉しい夢想であつたと言ひ得るのである。なほ彼が古代精神復活の可能をたやすく信じたと同時に、現實の冷酷で強力な抗議に直面した時、てもなく回避して自己の感情的自由の中に陥つたことは、既に知らるゝ通りである。この覺醒と没落との後を承けて、古典の實證的研究と神道信仰の純化とに推進するのが、宣長以後の國學の歩みであつた。

そして、このどちらかと言へば存在を超えた所に無限を見ようとする國學の思潮に對して、無限を存在の裡に歸さうとする所に、洋學の傳統があつたと言へる。師弟の關係にあり、その出發點に於て同一であり乍ら、眞淵の詩情と源内の散文精神との相違の由つて出づる原因はそれであつた。洋學の場合では、生きとし生ける者への偽らざる愛情が、物があるがまゝの姿に適確に把握しようとする眞實への傾倒の基底となると共に、またその眞實への闘ひの裡に磨かれて行かうとするのである。そして、「誠の道を以てするとも、却て俗人近寄ざれば……滑稽を以て人を近寄、よく近く譬をとりて俗人を導」との源

内の苦肉の言に見る通り、時を得ぬ彼等の徑も亦險しいものであつたが、上述した利明の蝦夷同胞觀には、その峻嚴さに於ていまだ多くの限界を有しては居るものゝ、蝦夷への愛情が考古學的な検討を貫いて流れてゐるのを見ることが出来るし、源内・利明らの鑛産農業貿易による資源開發說にも、性急な政治との結合といふ大きな弱點を伴ひ乍ら、時代の要求に進んで自己を挺身し、生かし通さうとする強い智性への確信が認められたのである。この、存在への根強い追究こそが、蝦夷觀を眞淵の讚歌から、その置かれた悲慘な實情に於て直視し、進んで之を救済しようとする徳内の見地にまで到らしめた原動力であつたと見られる。

そして最後に、恰も國學者がその古典の學問的研究と神道の純化とを通じて、權宜の政治たる幕藩制を廢し、皇政の眞正に就くべきに目覺めた如く、洋學者はその海外事情の知識によつて祖國愛を高めたのであつた。即ち工藤平助・本多利明らの蝦夷地開拓意見が、露國の東漸南下の形勢に促がされたものであることは上述の通りであるが、親しく蝦夷地で赤人に接し、聞きしに勝る對露關係の緊迫さを知つた徳内は、特に祖國防衛の熱意に燃え、松前藩の惡政「前章ノ如ク人道ヲ制禁有ト雖モ、近年ニナリヲロシヤ國ノ赤人數多渡海シ、カノ國ノ法令ヲ示シ撫育教導スレバ、土人等大キニ懷キヲロシヤ國ノ風俗ニ化スレバ、何程松前家ニテ制禁スルトモ大國ナレバ屆事アタハズ、俗ニイワユル大海ヲ手ニテ防グトハ是ヲ云ベシ、開國ノ時至リタルト思ハル、處也、予モ日本國ノ生ヲ稟タレバ、前後ノ辨ヘモナク義ニ

セマリテ所説也」と、一介の御普請役竿取に過ぎぬ己れが身分をも忘れて、大聲疾呼せざるを得なかつたのである。^(五四) 彼が蝦夷地に天照大神の神廟を奉建し、蝦夷に崇祀を説いた眞意の由つて出づる所は、眞實を求めて止まぬ學問精神に裏付けられ、冷靜適確な時勢の把握に高揚せしめられた、純粹強烈な國民的祖國愛に外ならなかつたのである。

畢竟、徳内の「蝦夷草紙」に望まれる日本民族學の東雲は、傳統の國民的祖國愛に加へ、基礎を物産學の裡に生長した學問精神に置く人間愛と、文化乃至智性への確信とが、國內の政經事情と北邊の國際情勢とに促がされて、未開民族蝦夷に接した時、ほのぼのと明けそめたものであるといふことが出来るであらう。

本稿では、最初豫定してゐた徳内の蝦夷研究の内容にまで進むことの出来なかつたのが遺憾である。この點に就ては、徳内以後の蝦夷研究の推移と共に、他日改めて考察する機會を得たいと思ふ。

註

(一) 本多利明「蝦夷開發に關する上書」寛政四年七月、本庄榮治郎博士編「本多利明集」(近世社會經濟學說大系ノ内)三二二頁、因みに云、利明の著作を蒐集印行せられた本庄博士の勞を多としなければならぬ。たゞこの利明集は頁數の關係等もあつたであらう、惜むらくは拔萃が多い。進んで未收書と共に全集の刊行が期待せられる。

(二) 「本多氏論策蝦夷拾遺」寛政元年十一月、(利明集二九六頁)

- (三) 只野眞葛「昔ばなし」(大友喜作氏「對露國防の濫觴」四七、四八頁所引)
- (四) 工藤平助「赤蝦夷風説考」(大友氏の「前掲書」卷頭に内閣本によるこの書の全文が收録せられてゐる)
- (五) 大友氏「前掲書」五一頁
- (六) 「仙臺人物史」(大友氏「前掲書」三四、三五頁所引)
- (七) 清野謙次博士「伊藤東涯と青木昆陽——日本考古學人類學史の研究」(歴史學研究十二ノ四、昭和十七年四月)
- (八) 並河天民「開疆録」(未刊)
- (九) 白井光太郎博士「贈位せられたる五大博物家」(「本草學論考」第一冊所收)
- (一〇) 「新撰洋學年表」「日本博物學年表」參照
- (一一) 「松平家譜」(平賀源内全集附載「源内先生のことども」所引)
- (一二) 秩父に於ける源内の製鐵事業の顛末は全集上卷々尾の「文書」及び下卷所收「書翰」によつて知られる。
- (一三) 桃源宛源内書翰(全集六二六頁)
- (一四) 佐伯理一郎氏藏源内書翰(全集六一五頁)
- (一五) 「陶器工夫書」(全集二一〇—二一〇頁)
- (一六) 「蝦夷松前烏序」(全集五八八頁) 因みに、全集には松前鳥となつてゐるが鳥は烏の誤り。
- (一七) 三田村鳶魚氏「風來山人の凶宅」(「足のむくま」二七二—二七七頁所收)
- (一八) 「金の成木」(源内全集五七九頁)
- (一九) 會田安明「自在漫録」(森銑三氏「學藝史上の人々」六頁所引)
- (二〇) 日本經濟大典所收の草間本三貨圖彙では、光被録の書名なく、附録卷八に收められてゐる。卷三十四としたのは三十五卷本による卷數で、三十五卷本を原本に近いとする遠藤佐々喜氏の所説に従つて、是を採つた。

- (二一) 「光被録」は尾闕になつてゐるので、この摘録では、後段を補つて置いた。論旨には誤りない心算である。
- (二二) 利明「蝦夷開發に關する上書」(利明集三二二頁)
- (二三) 森氏「前掲書」二二頁
- (二四) 利明「經世祕策」(利明集五一頁)
- (二五) この棹銅より金銀分離の一條は、「本多利明手簡」(利明集三六一—三八七頁)による。
- (二六) 「西域物語」下(利明集一八六頁)
- (二七) 「經世祕策」(利明集二六、二七頁)
- (二八) 「四大急務に關する上書」(利明集二六八頁)
- (二九) 「經世祕策」(利明集四三頁)
- (三〇) 「本多氏論策蝦夷拾遺」(利明集二九九—三〇一頁)
- (三一) 徳内の「天然訓」に與へた鹽野知哲の序文(森氏「前掲書」五六頁による)
- (三二) 野村兼太郎博士「徳川時代の經濟思想」第八章「本多利明」四五七頁
- (三三) 高倉新一郎氏「天明以前の蝦夷地開拓意見」(社會經濟史學三ノ二)
- (三四) 新村出博士「平澤元愷の長崎松前漫遊」(「南蠻廣記」所收)
- (三五) 「仙臺人物史」(前出)
- (三六) 平秩東作の傳記としては森銑三氏「平秩東作の生涯」(國語國文三ノ七、八)が最も詳しい。
- (三七) 柳田國男氏「菅江眞澄」(創元選書の内)
- (三八) 拙稿「守部學の成立」(史學二一ノ一)に、橘守部の漢學の師として擧げた「築地の葛西健藏」といふのが、即ちこの葛西因是である。

(三九) 井上通泰博士「大原左金吾」(南天莊雜筆所收) 森銑三氏「大原左金吾」(近世文藝史研究所收)

(四〇) 平賀源内書翰(源内全集六二四頁)

(四一) 「帳祕藩臣錄」(日本教育史料六ノ二六四頁)

(四二) 平田篤胤「千鳥白浪」

(四三) 「長器論」(利明集二〇九頁)

(四四) 「蝦夷開發に關する上書」(利明集三二三頁)

(四五) 「本多氏論策蝦夷拾遺」(利明集三九八—九頁)

(四六) 「經濟放言」(利明集一〇四、五頁)

(四七) 「本多氏論策蝦夷拾遺」(利明集三〇一、二頁)

(四八) 最上鐵五郎「家大人小傳」、原文漢文、(皆川新作氏「最上徳内に關する新資料」傳記二ノ六による)

(四九) 「新撰北海道史」第一卷概説、第二卷通説一、及び森鐵藏氏「前松前藩時代に於ける場所請負制度」による。(社經史三ノ五)

(五〇) 平秩東作「東遊記」この書はまだ印行されてゐない。

(五一) 坂倉源次郎「北海隨筆」同右

(五二) 「縣居翁家集拾遺」(賀茂眞淵全集十二ノ一五一頁)

(五三) 眞淵の蝦夷への關心に就ては竹岡勝也氏が「賀茂眞淵の國學に於ける古代と自然」(「日本思想の研究」所收)で觸れて居ら

れる。

(五四) 露國の南下、特にその千鳥撫育の形勢についてベルグ「カムチャツカ發見とベーリング探檢」(小場有米氏譯)等に詳かであるが、その實狀を知ると徳内の焦躁が決して杞憂でなかつたことが判る。

附記、本稿の作成に當つて文獻の閲覽に便宜を計つて戴いた小池健夫氏並に新撰北海道史を貸與せられた山口榮藏氏に深謝する。